
Wonderful World ～ 剣と魔法と魔界の物語 ～

悠久の魔王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Wonderful World ｝剣と魔法と魔界の物語｝

【Nコード】

N9916Y

【作者名】

悠久の魔王

【あらすじ】

剣、魔法、魔界…

世界を満たす不思議な力…

荒れ始めた世界は、裁きが下るのか？ 元の平和な世界に戻るのか…？

素晴らしい世界… wonderful world

感想バシバシ送って欲しい…。

カッテノオハナシ（前書き）

こんにちは〜！

いやはや…母が勝手に携帯いじくって、小説が消し飛びました（笑）
&（泣）

立ち直って、新しく執筆ライフを送るかと…

家に携帯放置するなら、ロック掛けましょう！ 自分の二の舞にならない様に…

カツテノオハナシ

かつて…

剣と魔法が飛び交う混沌とした時代…

人間、魔界、獣人の戦争が頻繁にあった。

いずれそれぞれの長も変わり、平和的な考えを持ち始めた。

長達はお互いに支え合いながら、世界を生きる…

そう決めた。

未来、この約束が破れる時に我らが蘇り、世界に裁きを下す。

そう言い残し、長達は果てしない世界へ消えて行った…

そう、wonderful world…素晴らしき世界に。

そして時は過ぎ去り、魔法が発展した時代…

犯罪も増え、山賊・海賊が現れた。

謎の遺跡の発見、魔界からの浸食…

この世界に、裁きが下るのだろうか…？

カツテノオハナシ（後書き）

ファンタジーって設定が大変ですな…。

クロノソウケンシ（前書き）

最初のお話…

結構ずらずら書いたなあ〜イエイ！

と思ったら閲覧モードでたった2ページ…（。□。；）

漫画家の1ページは凄く長いたる事を銀髪侍が言っていましたたが、小説は読者にとって1ページは短いものです…。

クロノソウケンシ

ここは、レイヴン騎士団。

剣の道を行く者が、世界の悪を滅ぼす。

…らしい。

「おいおい、チャーハン焦げてんぞ!」

この少年、ヴィストも騎士団の一員…

今はチャーハンが焦げて焦っている。

「ひゃあ、大変!　すぐに火を消さないと…」

そして彼女、レミアも騎士団の一員。

ヴィストの妹である。

ヴィストは過去、魔族に両親を殺された。

妹レミアを守るために剣を学び、騎士団に所属する事になった。

剣は、自分で作ったらしく黒い剣を持っている。

「あ、わあぁっ！」

ガシャン！

レミアはチャーハンを思い切りこぼした様だ。

騎士団は主に、街中の事件を解決する。

そして今日もまた、事件は起きるのである…

「大変だぁ、また街中でごろつき共が暴れてやがる！」

とまあ、こんな感じで警備兵が異常報告をして、ヴィスト達が解決に向かうと…

しかし…

「はぁ、腹減った…」

「ちよつ、お兄ちゃん！　しっかりしてよ！」

ヴィストは空腹ではまともに動けないのであった。

「とりあえず、行くかあ……」

完全に脱力。

《街中・噴水広場》

「つたく、散れ野次馬共！」

ごろつきの一人が怒鳴り、ナイフをチラつかせている。

「この女がどうなってもいいのか？」

「す、すみません！　どうかアンナは傷つけないで下さい！」

必死に謝る細身の男、それを囲むごろつき。

どうやら、あの男がごろつきとぶつかって揉めた様だ。

「はあっ、傷つけないで下さいだつてよお！　こんな弱っちい男にこの女が守れるかつての、ギャハハハ！」

タッタッタ…

「この嬢ちゃんは俺等が可愛がつてやんよ」

もう一人のごろつきが男を投げ飛ばし、女を連れ去ろうとした時だった。

ドカッ！

「ぐっ、デメエ何処見てやがる！」

ぶつかったのは、黒いマントで身を包んだ少年。

その黒で身を隠す様に、全く姿が見えない。

「失礼…」

そう言って少年は去ろうとした。

が、しかし…

「テメエ、俺にぶつかってスルーとは良い度胸だな、ちょっとタイマン張ろうや！」

ただでさえ、細身の男にイラついていたのに、更に煽ってしまった。

そこへ…

「レイヴン騎士団だ！ 貴様等、いい加減にしろ！」

ヴィスト率いる騎士団が駆けつけた。

勿論、ごろつき共は逃げるつもりだ。

「ちっ、下手に動くとこの女を殺すぞ！」

手のナイフを振り回し、威嚇をしながら裏路地へ逃げようと後退りする。

「はあ、面倒事になるのはごめんなんだけど…」

黒マントの少年は、素早く二本の剣を取り出し、ごろつきに斬りかかった。

しかし、双剣つかいは珍しく無いが…

「へえ、双剣使い…面白い奴だな。」

「お兄ちゃん、仕事しなきゃ！」

眺めている二人はまだ気付かない…

少年は確かに双剣使い、だが一番の違いは…

両手剣の双剣だという事だ。

両手剣を片手で振るう者も僅かに居る。

それを超え、両手に両手剣を握る彼は並みの剣士ではない。

「影刃拔刀…」

そして、ごろつき共の後ろに一瞬にして移動。

既に剣を腰の鞘に収めていた。

「闇夢流転ッ！」

チャツと剣を収めきった時、ごろつき共は見えぬ刃に斬り裂かれた様にいきなり傷だらけになった。

「ああ…、ちくしょう！」

ごろつきの中で一番強そうなゴリマツチョがとある市民に向かって、ナイフを向けながら走って行った。

「なっ、あんにゃろ！」

ヴィストも追いかけるが、到底間に合う距離ではない。

その市民は、立ち尽くしながら悲鳴を上げ、誰もが諦めた。

その時、また彼が動いた。

黒マントの彼が…

「汝、我が身に宿り、一時の凩る風となれ…エアロバーストッ！」

一瞬だった…

ゴリマッチョは、突風に吹き飛ばされて、民間の壁を軽く6枚程貫いていた。

誰しも、呆然として10秒ぐらいポカーンとしていた。

ヴィストでさえも

「な、何だ…マジかよ。あんな魔法を使うなんて…」

まさに開いた口が塞がらない。

少年が立ち去ろうとした時、止まりかけの時は動きだした。

「お前は、何者なんだ…？」

ヴィストが問うと、少年はただ

「しょうもない旅人さ…」

そう答えて、走り去った。

少年の魔法でぶっ壊れた壁の弁償は騎士団が持つ事になったが、事の発端であるごろつきが反省も兼ねて肩代わり…

少年の正体は知らず、事件は意外な解決を遂げた。

「あいつは、ただ者じゃないな…」

そう言って、ヴィストはあの少年の正体を掴むついでに騎士団へ勧誘しようと、行動を起こすが…

それはまた別のお話…

クロノソウケンシ（後書き）

《キャラ紹介》

ヴィスト・レジスティア

年齢… 21才

性別… 男

武器… 黒鉄^{くろがね}

普通の長剣、なんと自作である。

剣を作る際にそこら辺に落ちていた、レアな鉱石「黒竜岩」を訳も分からず材料にした。

黒竜岩には邪気の魔力、一般的に闇の魔力が籠もっており、魔界に住む魔族の力の結晶と思われる。

黒い剣の為、ストレートに黒鉄と名付けた。

邪気のせいかな、戦闘中は余裕の笑みを浮かべ、楽しそうな表情だ。

キャラ設定では、両親を魔族に殺された為、唯一の家族レミアを守れるように、魔族と戦える強さを剣術で身に付けた。

何でも適当にやっている様に振る舞うが、頼りになる存在。

妹や部下を戦闘に同行させるのを嫌う。

クロケンシ、フタバビ（前書き）

ちあてちて、wonderful world＝話です！

黒マントの少年の正体とは？

クロケンシ、フタタビ

ごろつき事件から数日…

ヴィストは退屈そうに街を歩いていた。

これと言って目的があるわけでも…

いや、ある。

あの双剣士にまた会えるのではないかと少し期待していた。

旅人と言っていたから、もう街を出たかも知れない…

だが、僅かな可能性がヴィストを動かしていた。

住宅街、市場、週に一度のフリマ、かなり時間が過ぎた。

「はあ…、やっぱり居ねえな。運命なんて物に縁がn…」

「泥棒ー！」

一人呟くのをかき消すような大声がフリマ会場に響く。

振り向くと、ヘンテコなお面を付けた奴が長めのナイフを持って、こちらに走って来ていた。

「あ、やべえ…剣が無え」

ヴィストは体術は心得て無い為、剣が無いと結構弱かったりする。

「どけー！」

泥棒は突進して来ている。

このままだと心臓をグサリ…

「えーっと、確か…突進してる奴には横から対処っと。」

ヴィストはとりあえず、横に避けて足払いを掛ける事を考え、サッと突進を避けた。

が、足払いする前に走り去った…

泥棒はまだ走っている。

「あ、やべ…何やってんだオレ！」

慌てて追いかけるも、泥棒はとんでもない速さだった。

そしてヴィストはまた出会うこととなる…

彼が望んでいた者と…

目の前をあの時の黒いマントが通り過ぎた。

かなり速く、泥棒を仕留めようと獲物を狙うチーターの如く…

「ファントム、あいつの足を狙ってくれ」

「あいよ！」

そして、ファントムと呼ばれた少年と同じようにマントを纏う者は、

手に持つ大きな鎌を投げた。

「な、何だよあいつ！ くそ、逃げ切るんだ…捕まってたまるか！」

泥棒の意志に背いて、鎌は足を捕らえた。

しかし、足は切れずに繋がっている。

鎌は華麗な弧を描き、ファントムの元へ…

「レイ…今だ！」

鎌が完全にファントムの元に戻った時、泥棒に変化が起きた。

「何だよ…足が、動かない！」

その場に倒れた泥棒は、地面を這いながら逃げようとする。

「……………」

ヴィストは黙って見ているしかないが、騎士団として犯罪の処理はしなくてはならない。

「罪は罪、罰は罰…今此処に下す天の雷、罪に罰を！」

バチィッ！

泥棒の手足を雷の縄が捕らえ、身動きを封じ込めている。

そうして、またレイは

「また騒ぎになっちまったな…」

「おい、騎士団のヴィストだ！ ちょっと本部に来てもらいたい」

ヴィストはマントを掴もうとするが、勿論レイは逃げる。

「チッ、面倒事は苦手なんだよなあ…」

レイはそう言って、チョコレートをくわえながら逃げ去った。

「待て、任意同行してもらおう！」

ヴィストも追いかける。

そんなこんなで、黒いマントの少年ことレイは追われる事になりました。

「つたく、だから目立つと捕まるって言ったのに…」

裏路地の行き止まりで息を切らすレイ。

「まあまあ、人助けも悪くないっしょ？ 名を告げずに去る正義のヒーロー！ 最高じゃん？」

その姿を表すなら死神がよく似合う、ファントムがそう言うも、レイは不服そう…

「だってさ、お前名前言つたろ？ 『今だ、レイ…』 って、何かクールに…」

確かに、少し戻ってみればそんな事を言っていた。

ファントムは顎が外れた様に口をあぐり開けて…

「あ…」

と、お約束の如く呟いた。

「あ…。じゃねえよ！ 何、一文字で思い出してんだよ！ もうダメだ…正体バレる。」

地面に手を付いて落ち込んでいる。 周りには何か黒いオーラが見える。

「居たぞ！ 例の黒マントだ！ 拘束して本部に連れて行け！」

其処へ、騎士団の警備隊が来た。

勿論、行き止まりに居た為にレイは捕まって本部に連行されてしま
うのだが…

それはまた別のお話。

クロケンシ、フタバビ（後書き）

《キャラ紹介》

レイ

年齢：19才

性別：男

使用武器：双剣ジエミニ

魔力により錬成された両手剣の双剣。

血に染まった様な赤黒い色をしている剣であり、2つから連想される双子宮のジエミニから名前を付けた。

キャラ設定としては、人前で目立つのを嫌って黒いマントに身を包む。

そこから黒の双剣士と呼ばれている。

一番の特徴はチョコレート中毒。

チョコレートが多量摂取をすると、鼻血が止まらなくなり失血死する。

その為、錬成で溶けない・なくならないチョコレートを作った。

甘い物が好きで、基本的には甘い物をマントの中に隠している。

因みに、実際にチョコレートを二年ぐらい食べると死亡するデータが出ています。

よる子はマネしないでね？

カコノキオク（前書き）

年末年始忙しい！

カコノキオク

さてはて、前回までのお話は…

黒マントの謎の少年レイ、彼は騎士団が駆けつける前にごろつきを片付け、泥棒を捕らえた。

そんな彼の正体を知るべく、ヴィストは動いた！

泥棒事件の後、行き止まりに立ち止まるレイを団員が確保。

レイは騎士団本部へ連行されるのだった…

《騎士団本部》

「んで、お前は何者なのか聞かせてくれ。」

足を組みながら、嘘はつかない様に…と付け足した。

「はあ、面倒な事になった…。」

諦めて、話をする事にしたレイ。

彼の正体を知りたかったヴィストは、組んでいた足を直して聞いた。

「思えば、長い時間だった。

あの時は、何もかも必死になって生きていなきゃいけなかった。

毎日が辛くて、でも生きていなきゃいけない…

親からの暴力、周辺からの差別…

もう生きていたくないと、思っていた。

そんなある朝、眠りから覚めた。

自分の目の前には、見慣れない光景…

不思議な世界、最初は遂に捨てられた。

そう思った。

でも、悲しい事に違った…いや、嬉しい事か。

今までの嫌な日々と隔離された…

別世界だった。

その文化に触れて、暮らして…

生きているのが、楽しかった。

でも、別世界だろうと悪意・欲望・憎しみ…それらがあつて、犯罪があつて…

こんな良い世界を壊されなくなかった。

守りたかった。

そのために、魔法学を学び…剣を使い。

悪を絶つ旅人として、この世界…

グロノディアに歩み出した。

そして、今に至る…かな。」

そう、オレはこの世界の人間じゃない。

ただ、辛い現実から逃げて来た少年。

「…そうか。 お前…レイだったか？ オレ等の騎士団に来ねえか？」

騎士団、確かに目的としても誘いとしても、その言葉は魅力的なはず。

でも、今の自分には…

「悪い。 あまり賑やかなのは好かないんだ…。 せっかくの誘いだけど、な…。」
オレは何を求めているか、分からない。

幸せな人生、自由、平和な時間…でもそれに当てはまらない何かを求めている。

分からない、だから旅をすれば…

そうすれば、求める『何か』が分かるはず。

だからって、団体を好まないのは訳が違う。

ただ、一人で生きていて…

いきなり集団に溶け込むのは難しい。

「まあ、それがお前の答えならしゃあない…んじゃ、足止めして悪かった。」

サツと立ち上がると、お詫び程度に晩飯食っていけとの事だ。

「はあ、また面倒な…」

狭い部屋を出ながら呟いて、黒マントを羽織る。

「晩飯、晩飯〜！」　　やたら上機嫌なファントムと一緒に…。

《騎士団・部屋棟》

「腹減ったよお、レイ…食堂まだあ？」

単刀直入、簡潔に状況を説明すると…

迷った。

「むう、迷ったな！」

「何でどや顔！　ササッと食堂へLet's GO、OK？」

いやはや、広いんだよね…ここ。

だから面倒なんだよなあ…

「晩飯！　ば〜ん〜め〜しっ〜！」

ファントム、気持ちは分かるさ…

でも、場所が分からなきゃね…。

「あの、どうしました？」

不意に声を掛けられてちょっとびっくりしたが、金髪の少女が目の前に居た。

手にはサーベルの様な剣が鞘に収まっている。

「んあ、えっ…とね。食堂どこかな？ 道に迷っちゃってさ…。」

初対面の人と話すのって苦手だな…

って今思った。

「新しく入団した人かな？ 食堂はこの棟からでて、中央棟…本部入り口から真っ直ぐだよ！」

「そっか、ありがとう。」

彼女の剣が気になったが、これ以上話をするとな面倒になりそうだから食堂に向かうことにした。

「遅かったじゃねえか…」

ヴィストは既に完食。

「迷ってたんだよ。」

ファントムは双方を無視して、出された料理を食べ尽くす。

「はあ…」

既に料理は食べ尽くされ、レイは結局昼食を探しに狩りに行ったのだが…

それはまた別の話

カコノキオク（後書き）

ちよこつと世界観！

《文化》

人々は基本的に世界の創造神クリエーターと呼ばれる神を信じている。

建物はレンガか木造、食物は牛の様なモツフィスの肉、黒い鳥ガルーチヨの鶏肉もしくは野菜をメインにしている。

魚介類は食さない。

クリエーターや人々は海から生まれたと信じ、海を聖なる場所、海中の生物をクリエーターの使いだと思われている為、食さない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9916y/>

Wonderful World ～ 剣と魔法と魔界の物語 ～

2011年12月25日23時47分発行